

大野斉子著

『シャネル N°5 の謎 —— 帝政ロシアの調香師』

群像社, 2015 年, 311 頁

相 沢 直 樹

また一冊異色の本が出た。

本書は「シャネルの 5 番」と呼ばれる、あまりにも有名な香水の成立をめぐる謎解きを軸に、香りと匂いの歴史・文化を概観し、ロシアの香水産業の発展を跡づけながら、ロシアと西欧の文学を論じ、伝統文化から世紀末芸術にまで語り及んだ力作である。

この香水は誕生から百年近く経った今もシャネル社のフレグランス部門の看板として君臨しているのみならず、常に世界の香水売り上げの上位を占める「モンスター」¹である。マリリン・モンローの「夜寝るときに身にまとうのはシャネル N°5 を数滴だけ」という言葉から、この香水に「セクシー」なイメージを抱く人も少なくないようだ。

シャネル N°5 は 1920 年にフランスのラ・ボッカにある研究所で、エルネスト・ボー (1881-1961) という天才的調香師によって生み出された。この香水には現在、濃度の順に「パルファム」, 「オー・ド・パルファム」, 「オー・ド・トワレット」などがあるが², ボーが創作した「パルファム」の組成は今も当時のままと聞けば、彼の偉大さがしのばれよう。ボーの名はこの香水を語る際に必ず登場するが、彼がモスクワ生まれのフランス系ロシア人 (こういう括り方でよいのか心許ないが) で、ロシア革命後フランスに移り住んだという複雑なアイデンティティと特異な経歴を持つ人物であることは、あまり知られていないのではなからうか。評者も本書に接するまでは詳しいことを知らずにいた。本書はこの謎めいた調香師エルネスト・ボーを中心に据えた、おそらく世界でも初めての本である³。

しかしまた、本書は単なるシャネル N°5 論に終始するものではない。著者はこの香水とエルネスト・ポーの関係に軸足を置きながら様々な学問領域を自在に出入りして、文字通り知の世界に遊んでいる。本書は直接的には香水論であり、香りの文学論であろうが、ロシア文化論でもあればヨーロッパ文化論、さらには時には身体論にまで目配せした、大胆で意欲的な議論が展開されている。考えようによっては、シャネル N°5 を肴に、著者が自由闊達に知見を披露しているように見えなくもない。

さて、本書は少々不思議な構成をしており、第一章で「名香シャネル N°5」の成立を追い、第二章から第四章までは香水文化の背景となる歴史・文化論的な記述に当てられ、最後の第五章でエルネスト・ポーの伝記が扱われている。

書評をお引き受けしたものの、日頃香水や化粧品にあまり馴染みがないことに加えて、話題が実に多岐にわたり、しかもそれぞれの内容が深く濃いもので、評者にはなかなか手強い一冊であった。内容を一口にまとめるのはきわめて困難だが、評者なりに整理してみると、本書の特長は次のような点にあるように思う。

- ① シャネル N°5 の前身を丹念に遡り、ブーケ・ド・カトリーヌ → ラレ N°1 → シャネル N°5 という道筋をはっきり示した。
- ② 埋もれていた伝記の事実を掘り起こし、エルネスト・ポーの生涯とロシアとの関係を詳かにした。
- ③ 様々な学問分野を横断し、異なる手法を駆使しながら、シャネル N°5 が生まれるに至る文化的背景を広汎かつ詳細に論じた（文化論的卓見に満ちている）。
- ④ 著書の全体を通して、シャネル N°5 のルーツが複数の意味でロシアにあることを論証しようという大胆な企図となっている。

以下、もう少し具体的に見てみよう。

① シャネル N°5 の前身の探究

シャネル N°5 はエルネスト・ポーが 1920 年にシャネルに差し出した十の試作品中の 5 番目だったこと、それが彼の人気作「ラレ N°1」をもとに作られたこと

はこれまでも知られていたが、著者は研究チームによる香水の成分分析結果をもとに、ラレ N°1 とシャネル N°5 の基本的な組成が似ていることを確認する一方、アルデヒド C11 は長くシャネル N°5 で最初に用いられたと考えられていたが、すでにラレ N°1 にも使われていたこと、ただし、シャネル N°5の方がはるかに濃度が高いことを示す。続いて、ラレ N°1 が「ブーケ・ド・カトリーヌ」の名称を変えたものとする説の検証にかかる。

「ブーケ・ド・カトリーヌ (ブケート・エカチェリーヌイ)」は、1912年にボロジノ会戦 100 周年を記念して作った「ブーケ・ド・ナポレオン (ブケート・ナポレオーナ)」の成功を受けて、ボーが翌 1913 年 (ロマノフ朝 300 周年) に発表した香水だが、エカテリーナ 2 世の不人気 (当時あまり好かれていなかったアレクサンドラ皇后と同じくドイツ出身だったため) からかあまり売れず、記録もほとんど残っていない幻の香水であった。名称変更説については「残念ながらそれを示す明確な証拠は残っていない」し、現物が残っていないので分析機にかけることもできないという不利な状況の下、著者は様々な資料を駆使して「ブーケ・ド・カトリーヌ」の姿を懸命に浮き彫りにしようとしている。

②エルネスト・ボーの生涯とロシアとの関係

著者は第五章をボーの伝記に当てているが、彼のモスクワ時代、フランス軍務時代、そしてフランス移住後の様子が、かなり詳細に記述されている。

フランスのリールに生まれた父エドアルド・ボーがモスクワにやって来て、小さな仲買業を営んだのが、モスクワのボー家の始まりだという⁴。

エルネスト・ボーは 1898 年にモスクワの香水会社ラレ社に入社 (17 歳)。同じ年に兄エドアルドが同社の取締役になった。9 年後にエルネストは同社の調香主任に抜擢され、最初の香水 Царский вереск (皇帝のヒース) を世に送り、頭角を現す。「ブーケ・ド・ナポレオン」をヒットさせ、順風満帆に見えた彼の人生は、この後、歴史に翻弄される。第一次世界大戦勃発とともにフランス軍に従軍したが (このことは彼がフランス国籍を持っていたことを意味する)、ロシア革命が起こると、フランス干涉軍の防諜部隊の一員としてアルハンゲリスク沖のムジグ島にある捕虜収容所の所長を務めた。ボーは 1919 年にそこからフランス

に引き上げ、二度とロシアには戻らなかった。

著者は、フランスに移ってからも、調香師＝芸術家としてのポーの生活の本質的な部分、彼の存在の中核にロシア的な感性や趣味が息づいていたことを繰り返し指摘している。

功成り名を遂げた1942年の講演でポーは、調香師の芸術性は暮らした場所、読んだ本や好きな芸術家に必ず影響を受けるという持論とともに、自分の好むものとして「フランスの詩人や作家、そしてプーシキンの詩、ツルゲーネフ、ドストエフスキイの作品、ベートーベン、ドビュッシー、ポロディン、ムーソルグスキイの音楽」(56頁)、「帝室劇場のバレエやモスクワ芸術座の舞台、エコール・フランセーズやロシアの巨匠であるセローフ、レヴィターン、レーピンの絵画」(57頁)などを挙げている。自分の香水がロシア文化の影響のもとに生まれているとポー自身が考えていた、ないし、そのように理解されることを望んでいたらしいのは確かである。

著者はポーの感性がロシアで育まれたことを強調し、シャネルN°5の中に「ロシア」が潜んでいると言いたいのだろう。第一章で「シャネルN°5の源流は、エルネスト・ポーの生きた帝政ロシアの中にある」(58頁)と端的に提示された主題は、第五章では敷衍されて「ロシアで過ごした半生なくしてシャネルN°5は生まれなかった。調香師は芸術家であるという信念のもとにポーは新しいものを生み出し続けたが、創造に必要なものをポーは帝政ロシアで過ごした半生とロシア芸術から汲み上げた。」(292頁)と結論づけられている。

③シャネルN°5の文化的背景

本書の第二章から第四章には香りと匂いの文化史から始めて、近代化と悪臭、ロシア文学の中の香り・匂い、ロシア香水産業、世紀末芸術と香り……など、かなり広範囲に及ぶ歴史・文化論的な内容が詰め込まれている。直接的にはシャネルN°5誕生の背景を説明する目的で置かれているのだろうが、様々な卓見に満ちた個別の、独立した論考と読むこともできる。

『青銅の騎士』にはペテルブルグの匂いの記述がないが、フランスからの影響で生理学的ルポルタージュが現れる1840年代から、首都は汚く、みすぼらしく、

悪臭漂う街として描かれるようになる。ロシアで初めての香水会社、ラレ社がモスクワに設立されたのがこの時期だというのは、実に象徴的だ。

ロシアの香水産業の誕生から発展の歴史が様々な数字とともに詳述されているのはたいへん貴重だと思うが、その隣で展開される文化論的議論の方が評者には興味深かった。19世紀の香水のラベルやポスターに香料となった花の絵をテーマにしたものが多いことを、リアリズムの原理であるメトニミーの比喩的特性と関連づけて論じたり、ロシア人の「二つの身体」をめぐる議論の中で、本来西欧近代を象徴するはずの香水や石けんが「ロシア文化の古層にある身体観と直接結びつき、古き身体の回復を促すことになった」(182頁)という逆説など、切れ味鋭く、小気味よい。

わけても第四章においてソログープの『毒の園』、ワイルドの『サロメ』などを題材に「ファム・ファタル」やアール・ヌーヴォーの「溶解する女」に語り及ぶ中で展開されるシンボリズム文学論は、本書の白眉と言ってよいほどだ。

著者によれば、文化の古層が近代と隣り合わせに存在し続けたロシアには「近代科学とは異なる知が生きており、香りに霊的な力をみる感性が残されていた」(240頁)が、19世紀末から20世紀初頭にかけてこうした精神史が芸術や文学、思想の領域で一挙に表出した。そして、両性具有(ソロヴィヨフ)や復活のアイデア(フォードロフ)といった構想自体はロシア固有のものではないが、「こうしたアイデアが理念のままで終わることなく、最終的に物質化されることが目指されたということこそロシアの文化的な特色を見るべきではないだろうか」(243頁)という問題提起に続けて、「シンボリズムの文学は、科学の枠組みにはいった身体を目の端で捉えながらも身体が魂と一つであったはずの世界を十九世紀末の世界の中に持ち込んだ」(244頁)ことが指摘されている。

別の所で著者は「ポーが生まれ育った十九世紀末はこのロマン派の水脈を汲む象徴主義芸術の全盛期であった。現実世界の向こうに物質のくびきから解き放たれた目に見えぬ世界が存在し、そこに神秘や魔術が現れるという象徴主義芸術の世界観は香水文化が発展する温床になった。人間存在の生命が香りとともに解き放たれ、その香りは神秘の物語や幻想の世界を開いて見せる。」(284-285頁)と香水文化の発展と象徴主義の隆盛との因縁浅からぬ関係を示唆している。

以上のような議論からここで改めてシャネル N°5 の成立について考えてみると、著者の主張の根幹は、シャネル N°5 は当時の最新の科学技術の成果として大輪の花を咲かせたが、地下ではロシアの古い文化的基層に根差している。それを可能ならしめたのはシンボリズムを生んだ世紀末の文化的思潮である、というようにまとめられるのではなかろうか。

④ルーツはロシアに

本書は、シャネル N°5 のルーツがロシアにあることを伝記的事実と文化論の両面から論証しようという大胆な試みと読むことができよう。

まず、シャネル N°5 の前身がロシア帝政文化の黄金時代であった 18 世紀の女帝の名を冠して送り出された「ブケート・エカチェリーヌイ（ブーケ・ド・カトリヌ）」であったこと、また、ポーがフランスに移ってからも故郷ロシアへの思いを忘れず、ロシア人の感性を持ち続けたことは、すでに見た通りである。

しかし何より重要なのは（おそらく著者が最も強調したかったのではないかと思われるのは）、この香水が着想された場所が、エルネスト・ポーが最後に過ごしたロシアの地だということである。

ポーは 1946 年の講演で、名香を着想した瞬間のことを次のように伝えている。

私がシャネル N°5 を創ったのはどんな時期だったと思いますか？ まさに一九二〇年のことです。私が戦争から帰還するときでした。私は北極圏にあるヨーロッパ北部の田舎に配属されていました。白夜のころ、そこでは湖や川がたいへんみずみずしい香りを放つのです。私はこの香調を記憶にとどめ、作り上げました。(54 頁, 266 頁)

「どうもマユツバものだ。香水はそんな風にしてつくるものではない。」⁵とサガンが疑念を呈したこの言葉に、著者は真実を見出そうとしている。そして、ポーの戦時の足跡から、この田舎が彼がフランス干渉軍の収容所長をしていたムジユグ島を指すと推理した著者は、この島が、戦争と革命によって仕事も財産も失い、二度と故郷に戻れないことを予感していた「ポーのロシア生活の最後の

場」であり「死の島」であったことに着目している。

ここで白夜の湖の前に立ちつくすポーの姿を描き出す著者は、もはや伝記作者ではなく詩人である。収容所の廃墟が残るムジグ島には荒涼とした風景が広がっていたが、冷気に覆われた朝の湖や川から（神秘的な）水の香りが運ばれてきた。その「人の営みが過ぎ去った後、なおも透徹した美しさを放つ香り」に彼は「永遠の時間が支配する死の静寂」を見たが、同時にその（不思議な）みずみずしさは、すべてを失った彼に「再生への啓示」をも与えたのではないか。著者の推理はこのようにまとめられるように見える（※括弧内は評者の補足）。

ただ、シャネル N°5 の原点をこの島の水の香りに求めながら、「それが何であったのかを我々に伝えるのは静けさと彫琢ちやうたくされた美しさをたたえたシャネル N°5 の香りだけである。」というのは堂々巡りである。しかし、時には論理を越えたレトリックに要請するしかないことがある、と著者は覚悟を決めたのかも知れない。

この時のポーが見つめていたものを、著者は「シャネル N°5 の原風景」と呼んでいる。チャイコフスキーをもじれば、交響曲「白夜の湖の幻想」、刑事コロンボ」を捻れば、夜想曲「別れのパルファム」といったところか。

ポーがシャネル N°5 を創ったのは故国ロシアを離れて間もなくのことなので、この香水には「ロシアの幸福な思い出とともに、美しい自然、そして戦争時代の記憶がポーの作ったこの香水にもまして濃厚に、鮮やかに刻まれたはずだ」（268 頁）と著者は主張する。

評者が先ほど③の最後にまとめたのは、実はシャネル N°5 の前身であるラレ N°1 誕生までの背景なので、補足が必要だった。著者のこれまでの議論を合わせると、この香水はさらに白夜のムジグ島でのポーの神秘的な体験を結晶化させるかのように、アルデヒドを増してシャネル N°5 として生まれ変わって登場することになった、ということだろう。

シャネル N°5 は「フローラル・アルデヒド」という系列を生み出した、画期的な香水である。白夜の湖の香りにヒントを得て作られたとする著者の説の大きなポイントは、この香水に「抽象的」で「ミステリアス」な印象を与えているとされる、アルデヒドの斬新な配合をポーがどのようにして思いついたのか、につ

いて物語を提供できるように見える点にあるのだと思う。

以上は本書を何度か読み直し、ノートを取った上での評者なりの理解である。評者にはいささか荷が重く、論旨を追うので精一杯だったことを白状しておく。以下、自らの力不足を棚上げしつつ、気がついたことを述べさせていただく。

結節点としてのエルネスト・ボーに着目して、そこからあちこちに論を進めるというのは魅力的なアイデアだったかも知れない。しかし、少々盛り込みすぎたのではないか。一読しただけでは全体が見渡せず、よく分からなかった。統一体として把握しにくいのである。また、記述に重複もあれば、議論の順序があるような、ないような感じで、奇妙な話だが、同一テーマのもとに複数の著者が寄稿するオムニバス形式の論文集を読んでいるような感覚にとられることもあった。

内容によって本を分けるか、構成にもうひと工夫ほしかったと思う。たとえば、全体を大きく二部構成にして伝記的・歴史的記述の部分と文化論的考察を分け、前者は時系列順、後者は話題別にまとめる等。現行の構成は、残念ながら、読者のことを十分に考えているとは思えない。個々の議論運びやそこで示される知見に関しては注目すべき点が少なくないので、なおさら惜しまれる。

それから、できれば巻末にボーの生涯も含め、本書で取り上げたことを記した略年譜のようなものが欲しかった。

著者も言うように、現在、香りは学術的には化学、社会においてはファッション産業の領分にあり、人文社会系の研究対象としては周縁に位置している。著者はこの分野の先駆者であるアラン・コルバンの『においの歴史』に触れるのを忘れていないが、本書はアナル学派の手法のみによるものではない。未開拓の領域を切り開き、人文科学にとどまらない様々な手法を駆使して、思う存分腕をふるった著者の勇氣と才覚には敬意を表したい。個人的には、本書でバラの香りが取り上げられているのを読んで昔の秘かな計画を思い出し、バラの文学史か薔薇の詩学のようなものを書いてみたくなって来た。

(あいざわ なおき)

注

- ¹ ティラー・マッツエオ（大間知知子訳）『シャネルN°5の秘密』（原書房, 2011年）, 12頁。
- ² さらに近年シャネル社は「N°5 からインスピレーションを得て誕生した」という「オー・ブルミエール」なる新商品を売り出し中である。
- ³ これまでシャネルN°5は、専らファッション業界の革命児ココ・シャネルとの関係で語られて来た。たとえば、数年前に出た、本書とよく似たタイトルの『シャネルN°5の秘密』は、「その〔=シャネルN°5の〕秘密は、この画期的な香水のルーツが帝政ロシアの忘れられた香水にあるというのではない」と、本書と正反対の立場に立つ。cf. マッツエオ, 前掲書, 266頁。なお、この本の原題は *The Secret of Chanel No. 5: The Intimate History of the World's Most Famous Perfume*. (2010) である。
- ⁴ 本書の注には別の説として、初めてロシアにやって来たのはエルネストの祖父ジャン・ジョゼフ・ポーで、ナポレオン軍の兵士としてやって来て捕虜になったが、もともと俳優だったのでペテルブルグの帝室劇場に入ったという、ロシアのある雑誌からの記事も（裏付けがないということで参考として）紹介されている。音楽家ツエーザリ・キューイの出自を思い出させる話である。
- ⁵ フランソワーズ・サガン, ギヨーム・アノトー（鷲見洋一訳）『香水』（新潮社, 1984年）, 186頁。